

星—科学と神話—

小尾 信 弥 著

(三省堂, 新書判, 195頁, 250円)

やさしい文章でよくまとまった, 星座に関するギリシャ神話が主な内容の本。全天の星座を春夏秋冬の季節によって四つの章にわけ, 各章毎に, その季節に見られる夜の星空の全体的な説明と, 一つ一つの星座にまつわるギリシャ神話や天文学のお話をつづったものである。

暗い目立たない星座や, 小さな星座についても親切に説明しており, 天文学の最新の話題も取り入れてはいるものの, あまりにソツなくおさまりすぎて, 旅行案内記のような平板な印象を持つ。ギリシャ神話についても, 多種多様の変化を持ち, 極めて雄大な世界をこのように簡明に記述している点は, 著者の知識の広さに負うものであり評価してよいはずである。にもかかわらずどういうわけか魅力に乏しい。面白いお話には違いないけれども, 何か読者に物足りなさを感じさせるのが残念である。「星座の親しみ」に見られる素朴な情感, 「われらの宇宙」に感じられる科学性, 「Field Book of the SKIES」の心のこもった星座案内など, すでに出版されているこの種の個性的なよみものに比較して, 特に出色の出来とは言えないような気がする。しいていうならば, 著者自身の人柄をしのぼせる暖かみが何となく伝わってくるような, そんな感じの本である。しかし本書の「あとがき」には著者の心が生々と表現されており, 現代人の共感を呼んでいることも忘れてはならない。専門の研究に携わるかたわら, これまで中, 高校の教科書を手がけ, マスコミの面でもよく知られている著者だけに, 神話のストーリーや天文学の知識だけでなく, 読者の心を神話の世界に, また星の世界の不思議さにいつのまにかさそいこんでしまうような, 心に響く何かが, いま少し本文の行間におこまれていてもよかったのではないだろうか。天文普及書の最も肝心な点であると同時に, また難かしい所とも言えよう。

よくまとまっており, 知識として利用するのに便利。一般むきの気軽に読めるよみものである。

(佐藤直宣)

天体観望の科学

瀬川 昌 雄 著

(毎日新聞社, 四六判, 237頁, 500円)

火星の大接近を目前にした昨年7月のM新聞に, その観測ブームに乗って, ある天体望遠鏡メーカーの品物が払底した, という記事が載っていた。これは天体観望の科学と取り組もうと, 若い人たちの間に, そのブームが高まりつつある好ましい現象かも知れないが, 私には, その反面, 正しい予備知識も持たずに“火星の大接近を観測しよう”という商魂たくましい, 現代の群小メーカーの宣伝文句に誘われ, 折角の小遣いははたきながら, 恐らく失望して行ったであろう沢山の天文ファンの痛ましい姿の方が先に連想させられたのである。

実際, 5センチや6センチの望遠鏡を火星に向けてみたところで, 思うように見られるものではない。口径の割に, ひどく高い倍率を使うことが, およそ無意味であることは, メーカー側も百も承知しながら, それを使わないと望遠鏡が売れないという誤った傾向が, いまだ根強くはびこるのは, そのことを指導する真に良心的なメーカーと, そして適当な入門書が少なかったのではないかと思うのである。

瀬川昌雄氏の天体観望の科学は, これから天体の観測に親しもうとする若い人々のための良き贈物である。この方面の入門書というものはもちろん無かった訳ではない。しかし, どのようなものかジュニアを対象としながら, いたずらに数式や数字が多く使ってあって, 初学者に, とっつき難い門構えを自から形作ったものが多かった。本書は, そうした意味で入門書中の入門書ともいえるもので, 著者の豊富な体験から, 真にジュニアの気持になって書かれた好著である。

本書は前半において, 一般の天体および天体現象, 星座等が, 観測のための予備知識として語られているが, 初学者には難解な天球の説明や惑星の運動等が, 非常に具体的に分かりやすく語られている。そして後半は実地の天体観測であるが, 文章のいたる所に見られる著者独自のユーモアも, 理解を助けているようである。私はこの書物を読みながら, 初めて天体観測を始めた20年余り昔のことをふと思い出した。あの頃は何んにもなかったが, もしこのような書物に恵まれていたとしたら, 大へんな曲り道をしなくて済んだであろうと。

なお, 本書には天体撮影法のことをほとんど語られていないが, 35mmカメラで天体を写すことがアマチュアの常識となった今日, この方面のことに少しでも頁がさかれていたら, 本書の意義もさらに高いものになったであろうと思われる。

(関勉)

ヨハネス・ケプラー—近代宇宙観の夜明け—

アーサー・ケストラー著
小尾信弥, 木村 博訳

(河出書房新社版, B6 変型, 363 頁, 600 円)

惑星運動にかんする三法則で有名なケプラーについては、ニュートンやガリレオなどに比べて意外と知られていない。これはその数少ないケプラーについての伝記の一つで、ハンガリー人の作家であるケストラーの科学史書の「夢遊病者たち——人類の宇宙観の変遷の歴史」のなかの、ケプラーをとりあつかった「分水嶺 (The Watershed)」の日本語であり、ケプラー生誕 400 年にあたる 1971 年に出版されたことは意義深い。

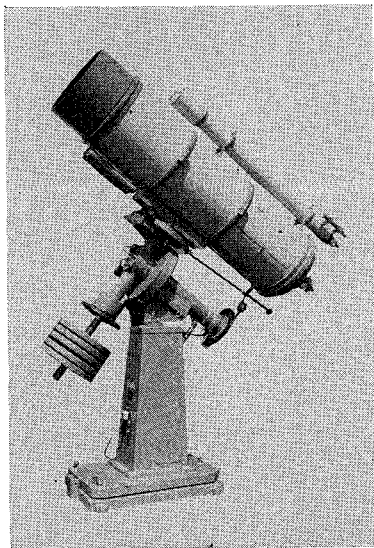
ケプラーはコペルニクスの唱えた地動説を、ティコ・ブラーへの観測を整理して確め、近代的な科学の経験的方法の先駆者の一人と考えられている。しかしながら、彼はグラーツの占星暦の発行でその経歴の一步をふみだして名声を得、ヴァレンシュタイン公の宮廷占星術師としてその生涯を終えているのである。ケプラーの第三法則また「調和法則」とよばれているが、彼はティコの観測の整理をてがける前から、どうして惑星の数は 5 つ (土星までの惑星しか当時は知られていなかった) しかない

のか説明しようとし、その軌道の配置の問題を、作り得る 5 つの正多面体と関連づけようとしていたのである。

このように、ケプラーは中世と近世の、神秘主義と経験主義の分水嶺に生きてきたのである。そして、コペルニクスやガリレオがあくまで固執していた円をすて、惑星の軌道が楕円であり、太陽は軌道の中心ではなく、その焦点にあるという法則を発見することに成功し、万有引力という考え方に今一步とせまっているのである。一方、「世界の調和」と「宇宙の神秘」とは彼の終生の固定観念であり、第一法則と第二法則を発見した後も、調和の概念を数学、音楽、天文学、占星術にあてはめ、その関連を見出そうとしているのである。

この本はアメリカ・マサチューセッツ州、ウォータータウンでの物理学の教授と学習の新しいいき方をめざす委員会によって指導されて発行された、Science Study Series の一冊にえらばれ、河出書房によって「現代の科学」シリーズとして訳出されているもので、分水嶺の時代の科学の発達を知ろうとする読者には一読をおすすめできる。

しかしながら、これを科学史の専門書として期待し、著者の独特のケプラー観をひきだそうとして読む人にとっては、引用文も長すぎ、多少退屈な本としてうつるのははなかならうか。
(古在由秀)



天体望遠鏡
ドーム, 製作

西村製の天体望遠鏡

40 cm 反射望遠鏡の納入先

- | | |
|--------|---------------------|
| No. 1 | 富山市立天文台 |
| No. 2 | 仙台市立天文台 |
| No. 3 | 東京大学 |
| No. 4 | ハーバート大学 (USA) |
| No. 5 | ハーバート大学 (USA) |
| No. 6 | 台北天文台 (TAIWAN) |
| No. 7 | 北イリノイズ大学 (USA) |
| No. 8 | サン・デューゴ大学 (USA) |
| No. 9 | 聖アンドリウス大学 (ENGLAND) |
| No. 10 | 新潟大学高田分校 |
| No. 11 | ソウル大学 (KOREA) |
| No. 12 | 愛知教育大学(刈谷) |

606 京都市左京区吉田二本松町 27

株式会社 西村製作所

TEL. (075) 771-1570
691-9580